Research Monograph Series

空席の力と色気の生成論
フェティッシュ・縮尺・余白・時空間的インターフェイスの美学

The Power of the Empty Seat and the Generation of Iroke:
Fetish, Scale, Margin, and the Aesthetics of Spatiotemporal Interfaces

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka （bigakusha-haha）
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Power of the Empty Seat and the Generation of Iroke:
Fetish, Scale, Margin, and the Aesthetics of Spatiotemporal Interfaces

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、美学者母の生成学における「空席」を、単なる身体の不在や未使用の場所ではなく、過去の痕跡と未来の参与可能性を現在へ接続する時空間的インターフェイスとして定義し、その力が感性的に「色気」として現れる構造を明らかにすることである。本論文は、『座・席・位相の生成論』で確立された「印―型―形―座―席―位―無名性―文化生成」という基本系列を維持する。空、即、相、是、非と同様に、空席の力、色気、フェティッシュ、縮尺、余白は新たな発展段階ではなく、系列を作動させ、または系列から派生する異なる論理水準の概念として位置づけられる。

本論文では、座を複数の参与可能性を関係づける共同的構造、席を座が一つの身体または行為を迎えるために局所化したインターフェイス、空席を身体による占有が未成立でありながら関係可能性が保存されている席と定義する。空席は、空間的には局所化された非占有であるが、時間的には過去の身体の痕跡、現在の期待、未来の到来可能性を保持する。したがって空席は、「無いものが在る」という言語デリバティブ論の構造と、「未来が現在へ畳み込まれる」というデリバティブ空間の時間構造を、身体的な場所において現実接地する。

色気は、身体や物体が所有する固定的属性ではない。それは、空席が未特定の他者の注意、接近、参与を誘発するときに生じる感性的かつ関係的な力である。フェティッシュはこれに対して、不在の身体との関係が特定の形、部分、印へ凝縮した状態を指す。フェティシズムは、その凝縮を生成した関係が忘却され、力が物それ自体の固有属性として知覚される固定化である。ゆえに色気とフェティッシュは反対概念ではない。色気は空席の力が他者へ開かれている様態であり、フェティッシュはその力が特定の形へ局所化・凝縮した様態である。

さらに本論文は、日本文化に反復して見られる縮尺、余白、間を、この時空間的構造から再解釈する。縮尺は単なる小型化ではなく、広い空間と長い時間を限定された形へ凝縮する操作である。余白は情報の欠如ではなく、他者の参与と未来の応答のために形の内部へ保存された空席である。間は空間的距離と時間的遅延を同時に保持し、異なる存在が差異を失わず接触する条件となる。日本文化の一つの重要な造形傾向は、空間的・形式的閉鎖によって時間的・関係的開放性を生成することにある。

増補された本論文はさらに、ノスタルジー、懐かしさ、哀愁、懐古性、復古性を、空席の力が過去へ向かう異なる時間的相として区別する。シミュレーションおよび現代美術のシミュレーショニズムを、過去らしさと参与可能性を記号として生産する操作として分析し、参与しても支配モデルを変形できない「擬似的空席」と、参与によって座そのものが再帰的に変形する「生成的空席」を区別する。最後に、生成の不可逆性を「追い越すことのできない可能性」としての死へ接続し、生物学的・社会的生存が続きながら

自己以前性による現実接地した生の生成が阻害された状態を「不可能生」として導入する。過去の生は同一のものとして回復できないが、生は新たに生成できる。本論文はこの構造を、生成の位相存在論、インターフェイス存在論、人間以前性と自己以前性、力の生成論、言語デリバティブ論、型の存在論、無名性の存在論、作品性の理論へ統合する。

キーワード

生成学；生成の位相存在論；空席；色気；フェティッシュ；縮尺；余白；間；ノスタルジー；シミュレーショニズム；シミュレーション；擬似的空席；不可逆性；死；不可能生；生成生；時空間的インターフェイス；作品性；無名性；文化生成

目次

Contents

0. 方法論的覚書 1

1. 空席の存在論 3

2. 空間的インターフェイスと時間的インターフェイス 5

3. 色気——空席の力の感性的現れ 7

4. フェティッシュ——不在の形への凝縮 9

5. 縮尺・余白・間 11

6. 日本文化における具体的様態 13

7. 美学者母の既存理論との統合 15

8. 比較哲学上の位置 17

9. ノスタルジーと空席の力の時間的諸相 18

10. シミュレーション・シミュレーショニズム・擬似的空席 20

11. 不可逆性・死・不可能生 22

12. 統一命題 25

13. 理論的意義と限界 28

結論 29

参考文献 31

方法論的声明 34

0. 方法論的覚書

0.1 本論文の位置

生成学は、存在、自己、芸術、言語、人工知能、制度、資本、文化を個別領域として分断するのではなく、それらがいかなる関係と作用によって生成するかを横断的に研究する。生成の位相存在論はその基礎理論であり、存在を固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用から局所的かつ暫定的に成立する位相として捉える。

本論文は新しい公理系を追加するものではない。『生成の位相存在論の公理系』『自己外部化の限界と存在生成』『人間以前性と自己以前性』『言語デリバティブ論』『評価・証明・価値の力学』『力の生成論』『即の生成論』『型の存在論』『無名性の存在論』『座・席・位相の生成論』に分散していた、不在、予期、接触、凝縮、継承の問題を、「空席の力」という焦点から統合するものである。

0.2 系列と派生現象の区別

本論文は、次の基本系列を変更しない。

印 -> 型 -> 形 -> 座 -> 席 -> 位 -> 無名性 -> 文化生成

この系列において、空は全体を開いたままにする根本条件、即は異質な位相を差異のまま接続する生成的接続構造、相は位を含む関係全体の現れ、是は即によって生成した関係の暫定的現成、非はその現成を固定的同一性から解放する作用である。

空席、色気、フェティッシュ、縮尺、余白、間も、この系列へ追加される段階ではない。空席は席の特定様態、色気は空席の力の感性的現れ、フェティッシュは不在関係の形への凝縮、縮尺は凝縮の造形操作、余白は参与可能性の保存形式、間は空間と時間を同時に調整する関係条件である。論理階層を区別することによって、生成学は概念の直線的列挙を避ける。

0.3 日本文化の本質化を避ける

本論文が「日本文化」と呼ぶものは、永遠不変の民族精神でも、すべての日本人に共有される心理でもない。盆栽、箱庭、枯山水、茶室、水墨画、和歌、俳句、工芸、建築などに、歴史的条件の違いを超えて反復して観察できる造形的・実践的傾向を指す。縮尺、余白、間を日本文化の唯一の本質とするのではなく、限定された形と開かれた関係を組み合わせる技法群として分析する。

同様に、仏教の色（rūpa）と日本語の色気を語源的に直結させない。九鬼周造の「いき」と本論文の色気も同義ではない。フロイト的フェティシズム、マルクスの商品フェティシズム、ウィニコットの移行対象も、生成学のフェティッシュ概念へ還元しない。それぞれとの差異を保持した比較によって、本論文独自の概念を明確化する。

1. 空席の存在論

1.1 座・席・空席

座は一つの物理的場所ではない。複数の席、身体、規則、役割、距離、記憶、期待を関係づける共同的な生成構造である。席は、その座が一つの身体または行為を迎え入れるために局所化した参与可能性である。したがって、座と席の関係は全体と部分の静的関係ではない。身体が一つの席へ参与すると、その参与は座全体の相を変形しうる。

空席は、席から何かを取り去った残余ではない。身体による占有が現在成立していないにもかかわらず、誰かが座る、戻る、代わる、拒まれる、待たれるという関係可能性が保存されている席である。何も置かれていない単なる空所と空席を区別するのは、この関係的な方向性である。空所は位置にすぎない場合があるが、空席は身体と行為を予期している。

したがって、空席の第一定義は次の通りである。

空席とは、身体による現在の占有を欠きながら、過去の関係と未来の参与可能性を局所的に保持する席である。

1.2 無・空・空席

空席には身体が「無い」。しかし、席、規則、期待、記憶、招待、排除は「有る」。空席を単なる無と理解すると、この関係の作用を説明できない。他方、空を空席そのものと同一視することもできない。空は、在席と不在、占有と非占有のどちらも固定的本質にならない根本条件である。空席は、その空が身体的尺度に局所化された一つの現象である。

空席は誰にでも開かれているとは限らない。予約席、玉座、追悼の席、制度上の欠員、排除された者の席は、それぞれ異なる方向性をもつ。したがって開放性とは無条件のアクセスではない。生成学における開放性は、現在の関係が唯一の終局的関係として閉じていないことである。制度的に閉じられた席であっても、その閉鎖が記憶、抗議、代替、継承を生成するなら、別の位相へ開かれている。

1.3 空席の力

力の生成論において、力とは、異質な位相の接続が現実の位相変換として現れる生成的運動である。この定義に従えば、空席の力とは、まだ実現していない参与可能性との関係が、現在の注意、感情、判断、行為を変形させる生成的運動である。

人は空席を見て、座る、避ける、待つ、思い出す、警戒する、譲る、招く。つまり、存在しない占有者が現在の行為を変える。空席は未来の身体を予告し、過去の身体を痕跡として残しながら、現在の関係を変形する。この意味で、空席は受動的な欠如ではなく、方向をもつ生成力である。

2. 空間的インターフェイスと時間的インターフェイス

2.1 空間的インターフェイス

空間的インターフェイスは、すでに成立した二つの領域を中立的に接続する装置ではない。それは、こちらとあちら、内部と外部、自己と他者の境界を局所化し、その接触から新しい関係を生成する場所である。入口、画面、庭、机、椅子、客室などは、使用の仕方によって空間的インターフェイスとなる。

席は、座の空を身体の尺度へ局所化する最小の空間的インターフェイスである。身体が席へ即するとき、客、主人、鑑賞者、制作者、研究者といった位が生成する。位はあらかじめ身体に内在する属性ではなく、席、他者、規則、行為の接触によって成立する。

2.2 時間的インターフェイス

時間的インターフェイスは、過去、現在、未来を外在的な直線上で連結する装置ではない。それは、過去の応答と未来の可能性が現在の行為へ作用する境界である。印は過去の接触を現在へ残し、型はその接触を未来へ反復可能にし、期待は未到来の出来事を現在の選択へ畳み込む。

『人間以前性と自己以前性』において、時間は存在が展開する背景ではなく、自己と自己以外のインタラクションが応答へ転化する位相として定義された。現在の行為は自己以外へ差し出され、自己以外は固有の指向性によって応答し、その応答が後の現在へ帰還する。時間的インターフェイスとは、この遅延と帰還を保持する構造である。

2.3 空席という交差点

空席は、空間的インターフェイスと時間的インターフェイスの交差点である。空間的には、身体が入りうる局所的な場所を示す。時間的には、以前そこにいた身体、現在待たれている身体、これから到来するかもしれない身体を一つの現在へ重ねる。

ゆえに空席は、空間的には空いているが、時間的には充満している。過去の痕跡が強ければ追憶や喪失を生み、未来への方向性が強ければ期待や誘惑を生む。この両方向が同時に作用するとき、空席は単なる位置を超え、時空間的な生成の節点となる。

空席の第二定義は次の通りである。

空席とは、不在の身体の過去と、到来しうる身体の未来を、現在の場所へ接続する時空間的インターフェイスである。

2.4 デリバティブ空間との接続

言語デリバティブ論では、存在しない指示対象であっても、言語、制度、評価、物語によって現在に実在的効果を生みうることが示された。空席もまた、まだ存在しない占有者や、すでに存在しない占有者によって、現在の行為を変える。「無いものが在る」という構造が、席という身体的インターフェイスにおいて現実接地している。

ただし空席は、純粋な記号的デリバティブではない。身体が実際に座れる寸法、物質、重さ、距離、制度上の制約をもつ。未来の可能性は現実の抵抗へ接地されている。この点で空席は、デリバティブ空間と現実空間の境界を形成する。

3. 色気——空席の力の感性的現れ

3.1 色気を属性から解放する

日常語の色気は、性的魅力だけでなく、色合い、趣、面白み、関心、欲求などを含む。しかし本論文は、この多義性を一つの本質へ還元しない。また、仏教の色をそのまま色気の語源的基礎とはしない。生成学が注目するのは、色気が対象の内部に閉じた属性としてではなく、対象と他者のあいだで生じるという構造である。

ある形が色気をもつのは、情報をすべて呈示するからではない。その形が、見えているものの内部に見えていない可能性を残し、他者の注意、接近、想像、参与を誘うからである。形が完全に説明され、一つの是へ固定され、他者が入る余地を失えば、色気は消える。

したがって色気の定義は次の通りである。

色気とは、形が空を保持し、空席を介して未特定の他者の注意と参与を誘発するときに現れる感性的・関係的な力である。

3.2 「まだ」の時間

色気には「まだ」という時間が含まれる。まだ触れていない、まだ知らない、まだ決まっていない、まだ到来していない。この未完了性は、単なる情報不足ではない。関係の成立が未来へ開かれていることを、現在において感受させる時間構造である。

したがって色気は、即による完全な接触そのものではなく、即を誘う方向性である。空席が他者を招き、他者がその誘いへ応答して席に即すると、位と相が生成される。是はその関係を「これである」として暫定的に現成させる。しかし、是が関係を説明し尽くせば空席は閉じる。非はその固定を解除し、色気の条件である未完了性を回復させる。

3.3 興・力・色気

即興における興は、現実との接触から力が方向をもって立ち上がることである。色気は、その接触が生じる前から、形の側が他者へ参与可能性を感じさせる相である。したがって興と色気は同じではない。色気は接触への誘いであり、興は接触から生じる運動である。

力は両者を包括する。色気は空席に潜在する生成的な力が感性的に現れた様態であり、興は、即という接続構造を通じた現実との接触において、その力が方向をもって立ち上がる局面である。色気がなければ参与の方向は生まれにくく、即がなければ色気は予感のまま現実化しない。

3.4 九鬼周造の「いき」との比較

九鬼周造は「いき」を媚態、意気地、諦めの複合構造として分析し、接近と距離、可能性と断念が共存する緊張を示した。本論文の色気は「いき」と重なる領域をもつ。とりわけ、関係が完了せず距離を保持することが魅力を生成する点で近い。

しかし生成学の色気は、江戸の特定の美意識や男女関係に限定されない。空席、建築、庭、作品、ウェブ・インターフェイス、制度、言語にも成立しうる。色気は文化類型ではなく、形が他者の参与へ非閉鎖であるときに生じる関係力として定義される。

4. フェティッシュ——不在の形への凝縮

4.1 フェティッシュの生成学的定義

フェティッシュは、一般に特定の身体部分や物への性的固着、宗教的呪物、商品が自律的価値をもつかのように現れる物象化など、複数の理論領域で用いられてきた。本論文はこれらを同一化せず、共通して見出される「関係の力が特定の物へ凝縮して現れる」という構造を抽出する。

生成学的には、フェティッシュを次のように定義する。

フェティッシュとは、不在の身体または不可視の関係との接触が、特定の形、部分、物、印へ凝縮した状態である。

使い込まれた椅子、脱がれた衣服、擦れた道具、石碑、しめ縄、グラフィティの印などは、それ自体を超えた身体、行為、記憶を現前させる。それらは「不在の他者が、印を通して無いまま在る形」となる。

4.2 フロイト・マルクス・ウィニコットとの差異

フロイトのフェティシズム論は、否認と代替の心理機制を中心にする。マルクスの商品フェティシズム論は、人間の社会的労働関係が物と物の自然な関係として現れる倒錯を分析する。ウィニコットの移行対象論は、主観的創造と外的現実の中間領域において、対象が分離と関係形成を媒介することを示す。

空席のフェティッシュは、これらのいずれにも還元されない。心理的代替でありうるが、それだけではない。商品として価値化されうるが、それだけでもない。移行領域を形成しうるが、発達心理学に限定されない。生成学が問うのは、不在との関係がどのように形へ局所化され、その形が新しい参与を開くか、または閉じるかである。

4.3 色気・フェティッシュ・フェティシズム

色気とフェティッシュは連続している。空席が未特定の他者へ開かれているとき、その力は色気として現れる。不在の力が特定の人物、身体部分、物、印へ強く結びつくとき、フェティッシュが成立する。

しかしフェティッシュは必ずしも閉鎖的ではない。形へ凝縮された過去の力が、別の他者による新しい解釈や参与を招くなら、そのフェティッシュは再び空席を開く。反対

に、力の関係的起源が忘れられ、「この物そのものが絶対的な力を所有する」とされると、フェティシズムとなる。

したがって三者は次のように区別できる。色気は開かれた誘発、フェティッシュは特定の形への凝縮、フェティシズムは凝縮の起源を忘却した固定化である。非はフェティッシュを破壊するのではなく、その是を関係へ戻し、形のなかに再び空席を生じさせる。

5. 縮尺・余白・間

5.1 縮尺は小型化ではない

日本文化の縮小志向は、弁当、扇子、入れ子、箱庭、盆栽など、広い機能や世界を限定された形へ詰める技法として論じられてきた。しかし生成学における縮尺は、単に大きな対象を小さく複製することではない。縮尺が生成的であるためには、縮小後の形が元の世界との接続可能性を保持しなければならない。

盆栽は大木の模型ではない。鉢という限定のなかに、山岳、風、光、季節、生長、枯死、長い手入れの時間を凝縮する。箱庭も地理的空間の縮小だけではなく、歩行、眺望、物語、記憶の可能性を小さな場所へ畳み込む。縮尺は量を減らす操作ではなく、広い関係を高い密度で局所化する操作である。

縮尺の定義は次の通りである。

縮尺とは、空間的広がりと時間的蓄積を限定された形へ凝縮し、その形から形を超える世界への接続を可能にする生成操作である。

5.2 余白は空席である

余白は、描画や記述が失敗した未使用部分ではない。形を一つの意味へ閉じず、見る者、読む者、使う者が参与できる可能性を保持する構成要素である。水墨画の描かれていない紙面、和歌で語られない情景、茶室の簡素さ、庭の砂面は、受け手が補うべき欠落というより、受け手の位が生成するための席である。

したがって余白は、平面的な空きだけを意味しない。言葉の省略、動作の休止、音の沈黙、用途の未決定、意味の遅延も余白である。それは空間的非占有と時間的未完了を同時に保持する。

余白の定義は次の通りである。

余白とは、形の内部に空を保存し、他者の解釈、身体、行為、未来の応答のために残された空席である。

5.3 間は時空間的インターフェイスである

間は、二つの存在のあいだに残った無内容な距離ではない。音と音、動作と動作、建築と庭、自己と他者が、互いの差異を失わず接触できるように、距離と遅延を調整する構

造である。磯崎新が「間」を日本の時空間として提示したことは、空間と時間を分離しない理解の重要性を示している。

生成学では、間を時空間的インターフェイスとして定義できる。間が短すぎれば差異は一方へ吸収され、長すぎれば接触が失われる。適切な間は、即を可能にしながら同一化を防ぐ。ゆえに間は、空席がその力を保持するための距離と待機の構造である。

5.4 閉鎖性と開放性

縮尺は境界をつくり、形を限定する。この意味では閉鎖作用である。余白は限定された形の内部に未実現の関係を保存する。この意味では開放作用である。間は閉鎖と開放の強度を調整する。

日本文化に見られる一つの重要な構造は、外形を弱くすることではなく、むしろ外形を強く限定しながら、その内部を意味的・時間的に開くことにある。茶室、定型詩、鉢、庭の境界は厳密である。しかし、その限定があるからこそ、わずかな差異、沈黙、季節、身体の動きが大きな作用をもつ。

したがって、開放性と閉鎖性は反対ではない。生成的な閉鎖は、関係を局所化し、現実へ接地する。生成的な開放は、その局所的関係を唯一の本質へ固定しない。形式的閉鎖性と関係的開放性の同時成立が、空席の力を最大化する。

6. 日本文化における具体的様態

6.1 盆栽

盆栽は、縮尺、余白、間、人間以前性、自己以前性が交差する実践である。鉢は根と土を空間的に限定する。しかし樹木は、人間の意図に完全には従わず、季節、光、水、病害、生理によって応答する。制作行為と樹木の応答のあいだには時間的な間がある。

枝間の余白は、単なる欠枝ではない。光、風、視線、将来の伸長が入る空席である。盆栽の色気は、樹形が完成していることより、形のなかにまだ生長と応答の余地が残っていることから生じる。古木性や傷は過去を形へ凝縮するためフェティッシュ的強度をもつが、生きた樹木である限り、その強度は未来の生成へ開かれている。

6.2 庭・茶室・建築

庭は自然の複製ではなく、自然との関係を身体的尺度へ局所化する座である。飛石、露地、石、砂、植栽は複数の席をつくり、歩行と視線によって異なる位を生成する。描かれない遠景、見え隠れ、曲折は、未来の身体運動を現在の構成へ畳み込む。

茶室は狭く、入口、畳、床の間、道具の位置が限定される。しかし、その閉鎖は参加者を一つの意味へ固定するためではない。身体の距離、沈黙、道具の受け渡し、季節の一回性を強く感受させるためである。空間的縮小が時間的密度を増し、空いた一席が到来者への予期を生む。

6.3 水墨画・和歌・俳句

水墨画の余白は、描かれなかった自然を鑑賞者の内面だけで補完させるのではない。墨、紙、視線、身体、記憶の関係を新たに生成する席である。余白は作者の意味を受け手が復元する場所ではなく、作者にも回収できない相が現れる場所である。

和歌や俳句の定型も、言語を閉じる規則であると同時に、語られない情景を開く型である。限られた音数へ季節、場所、身体、感情が凝縮され、省略された部分が読者の時間を招く。縮尺は言語の密度を生み、余白は意味の空席を生む。

6.4 民宿狭山美学校とWeb Installation

民宿狭山美学校では、建物全体が生活、宿泊、制作、教育、鑑賞、研究のあいだを変換する座として機能する。客室、食卓、庭、入口、作品、ウェブ画面は、身体と行為を迎

える複数の席である。使用されていない客室や椅子は、単なる未稼働資源ではなく、未知の訪問者と出来事を現在の場へ予期させる空席である。

Web Installationも、完成した画像や文章を提示するだけではない。画面は「あちら」と「こちら」を接続する空間的インターフェイスであり、過去の記録と未来の閲覧・応答を現在へ接続する時間的インターフェイスである。リンク、未完成のページ、更新可能性、閲覧者の操作は、デジタルな余白と空席を形成する。画面がすべてを説明する記号面へ閉じれば色気は失われるが、現実の場所と身体的行為へ接続されれば、空席は新しい位相を生成する。

7. 美学者母の既存理論との統合

7.1 自己外部化とインターフェイス存在論

自己外部化は、内面に完成している自己を外部へ複製することではない。自己が自己以外へ行為を差し出し、その抵抗と応答によって自己そのものが変形する過程である。空席は、この応答が起こるために自己の外部へ残された参与可能性である。すべてを自己表現で占有すれば、自己以外が応答する席は失われる。

したがって作品に余白を残すことは、装飾上の抑制ではない。それは、自己外部化を自己の拡張で終わらせず、自己以外からの生成を受け取るインターフェイスを設計することである。

7.2 人間以前性と自己以前性

人間以前性は、人間的意味や制度に先立ちながら、現在も人間を生成し続ける自然の普遍性である。自己以前性は、社会的・記号的自己像に先立ちながら、現在も自己を生成し続ける個別具体的普遍性である。空席は、この二つが出会う可能性を事前に内容化せず保持する。

盆栽の枝間、庭の余白、制作途中の形は、自然の応答を人間が完全に決定しないための席である。自己以前性が行為を差し出し、人間以前性が時間を介して応答する。その応答が帰還するとき、空席には一つの位が生じ、自己証明が起こる。

7.3 言語デリバティブ論

言語デリバティブは、未来の意味、評価、物語を現在へ畳み込み、まだ存在しないものへ作用力を与える。空席も未来の身体を現在へ畳み込む。しかし、空席は身体が入れる寸法と物質的抵抗をもつため、デリバティブを現実へ接地する。

空席が記号だけで作られ、誰も実際には参与できない場合、それは擬似的開放性となる。生成学における空席は、単に「参加可能」と表示された記号ではなく、参与が座全体を変形しうる実質的なインターフェイスでなければならない。

7.4 型・無名性・文化生成

型は、印の反復可能性を保持しながら差異を受け入れる構造である。型が完全な手順として閉じれば、後続者は空席をもたない。優れた型は、反復の骨格を保存しつつ、異なる身体、時代、環境が位を生成する余白を含む。

無名性は名の欠如ではなく、生成が特定の作者や所有者へ閉じず、他者の反復と変奏へ移行できる存在様態である。文化生成とは、空席を含む型が継承されることである。後続者は完成品を所有するのではなく、残された席へ即し、別の相を生成する。

7.5 作品性

作品性は、物体が作品として認定される性質ではない。形が自己、他者、環境の関係を変え、新しい感覚、意味、問い、行為を生成し続ける作用である。この作用には、形への凝縮と、他者のための空席が同時に必要である。

作品はフェティッシュ的強度をもちうる。多くの時間、身体、記憶が一つの形へ凝縮されるからである。しかし作品性は、その凝縮を物の自己完結へ閉じない。作品の色気とは、形が強度をもちながら、なお他者が座れることである。

8. 比較哲学上の位置

8.1 ハイデガー

ハイデガーの世界内存在は、主体が世界という容器の内部にあるという意味ではなく、道具、他者、目的、気分の有意義性連関へつねにすでに関与していることを示す。また現存在の時間性は、過去、現在、未来を独立した点ではなく、相互に開き合う脱自的統一として捉える。

空席は、この世界内存在と時間性を具体的な参与可能性として局所化する。空席は世界性全体ではなく、その世界へ身体が入り、位を生成しうるインターフェイスである。さらに生成学は、参与によって既存の座そのものが変形する再帰性を強調する。

8.2 仏教の空

般若思想における空は、形を消去した無ではなく、あらゆる現象が固定的自性をもたず関係的に成立することを示す。生成学の空も、空席を神秘的な無として実体化しない。空席が力をもつのは、空虚そのものが作用するからではなく、席と身体の関係が特定の占有へ本質化されていないからである。

したがって空席の力は、空を所有する力ではない。それは、空によって関係が終局的に閉じないことが、身体的・感性的に現れた力である。

8.3 西田・西谷

西田幾多郎の場所の論理は、個物を包む場を単なる外的容器ではなく、自己と世界が成立する根底として考える。西谷啓治の空の場は、主体と客体の対立が根源から問い直される場を示す。これらは、空席を主体が自由に占有する中立的空間と考えないために重要である。

しかし生成学は、場所や空の場を具体的な参与へ局所化する席と、接触を現実化する即を明示する。空席は包摂的全体そのものではなく、全体が個別の身体へ開く最小の境界である。

9. ノスタルジーと空席の力の時間的諸相

9.1 ノスタルジーは空席の力そのものではない

空席の力はノスタルジーより根源的である。空席の力とは、不在と未到来が現在へ作用する構造的能力であり、ノスタルジーは、その力が失われた、または想像された過去へ主として方向づけられたときに生じる感情的相である。同じ空席が未来の占有者へ向かえば、その力は色気として感受される。したがってノスタルジーと色気は同義でも単純な反対でもなく、一つの時空間的インターフェイスの過去方向と未来方向である。

スヴェトラーナ・ボイムの「復元的ノスタルジー」と「反省的ノスタルジー」の区別は、空席が閉じる二つの可能性を考えるうえで有効である。復元的ノスタルジーは失われた故郷を再建し、その再建を真実の回復とみなす。反省的ノスタルジーは憧憬、距離、時間の不可逆性にとどまる。本論の語彙では、前者は特定の過去の占有者を席へ戻そうとし、後者は痕跡と帰還不能の緊張を保持する。ただし復元は生きた型を再び開く場合があり、反省は哀愁の受動的消費へ閉じる場合もある。判定基準は、現在の参与が継承された座を変形できるかにある。

9.2 懐かしさ・哀愁・懐古性・復古性

懐かしさは、匂い、音、表面、道具、場所などの感覚的な印が、以前の関係を現在の自己へ接触させるときに生じる。それは、忘却されていた過去の自己が新しい相として現れる時間的な即である。哀愁は、この再来が同時に過去の回復不能性を開示するときに生じる。単なる悲しみではなく、不可逆的に不在であるからこそ、痕跡として現前する相である。

懐古性は、過去の形、実践、生活様式を肯定的に評価する傾向である。復古性はさらに、それらを現在へ再実装しようとする。生成学は、過去を完成した正解として現在の身体を従属させる閉鎖的復古と、継承された型に保存された空席へ現在の身体が即し、別の位相を生成する生成的復古を区別する。文化継承は後者に依存する。過去は廃棄も同一再生産もされず、新しい現実の応答へ曝される。

9.3 過去性が色気になる条件

使い込まれた建物、衣服、車、道具、庭は、過去の生活の痕跡を凝縮し、フェティッシュ的強度をもつ。その痕跡が失われた所有者だけを指すなら、形はノスタルジーへ傾く。過去を完全なモデルとして復元しようとすれば復古性へ傾く。凝縮された過去が未知の身体と使用のために席を開けば、その形は色気をもつ。

したがって、古いこと自体が生成的なのではない。時間が閉じたイメージになったのか、インターフェイスとして働き続けるのかが決定的である。歴史的密度と未来への開放性をもつ作品は、ノスタルジー、哀愁、フェティッシュ的強度、色気を同時に帯びうるが、それらは同一の感情ではない。

10. シミュレーション・シミュレーショニズム・擬似的空席

10.1 シミュレーションとシミュレーショニズム

シミュレーションは、モデルによって現実の作動または経験条件を再構成する操作である。シミュレーショニズムは、モデル、商品、メディア・イメージ、既成様式が経験に先行し、それを組織する社会的状況を扱う芸術的・批評的態度である。アプロプリエーション、ネオ・ジオ、ポストモダン美術の議論と関係し、原型を模倣するだけでなく、流通する記号によって原型と複製の区別そのものが不安定になることを示す。

ボードリヤールのシミュラークル論が重要なのは、記号が回収可能な原型を失い、相互参照しながら現実とされるものを先に生産しうることを示したからである。生成学はこの診断を受け入れつつ、現実のすべてを記号循環へ還元しない。身体、物質、自然、時間、他者は、モデルが決定しなかった仕方で応答しうる。この還元不能な応答が現実接地である。

10.2 シミュレーションされた懐かしさと色気

懐かしさは、古い字体、退色、フィルム粒子、古家具、録音ノイズ、復刻包装など「過去らしさ」の記号を配置することで生産できる。自分が生きなかった時代にも懐かしさを感じられるのは、その感情が歴史的生活そのものではなく、流通する時代イメージによって組織されるからである。ここで戻るのは過去の生ではなく、過去性のモデルである。

色気も、照明、距離、沈黙、隠蔽、演出された未完成、計算された余白によってシミュレーションできる。しかし、シミュレーションされた色気では、他者がどう魅了され、どう参与するかがあらかじめ大幅に設計されている。生成的な色気では、参与が設計に含まれない応答を生み、誘いを成立させた関係そのものを変形しうる。

10.3 擬似的空席と生成的空席

シミュレーションは空席を表示し、「参加可能」と告げながら、実際の決定をモデル内部へ保持できる。参加者は既定の経路から選び、データを生み、物語を確認するが、参与を統治する座を変更できない。これを擬似的空席と呼ぶ。

生成的空席では、身体が入ることによって安定した制度内の位が一つ生じるだけでなく、相と座そのものが変形する。身体、物質、他者、環境は、それぞれの指向性から応答するため、結果を事前に完全予測できず、痕跡なく初期状態へ戻すこともできない。

したがって区別は、デジタルと物理、人工と本物、複製と原型のあいだにあるのではない。物理的な参加型展示が擬似的参与しか許さず、デジタル・インターフェイスが制度的・対人的変化を現実化する場合もある。判定基準は、現実接地した応答による再帰的変形可能性である。

10.4 可逆性と不可逆性

シミュレーションは、反復、リセット、モデル内での変奏を可能にする傾向をもつ。存在生成は不可逆性によって特徴づけられる。接触は印を残し、参与者は変化し、履歴が蓄積し、以前の位相を完全には回復できない。シミュレーションされた死は再演できるが、身体の死はリセットできない。過去のイメージは現在化できるが、生きられた時間を同一のものへ戻すことはできない。

シミュレーションは、モデルの外からの応答へ開かれ、自己完結的な再現ではなくインターフェイスとして働くとき、生成的意義をもつ。シミュレーショニズムは、空席がすでにコード、ブランド、制度、美術史的様式によって占有されていることを批判的に可視化する。生成芸術は、非によってその占有を解除し、現実の参与を可能にするところから始まる。

11. 不可逆性・死・不可能生

11.1 「戻れない」という生成の局所構造

現実接地した即は、接触以前の状態へ完全には還元できない差異を導入する。身体、物質、他者、記憶、場所は変化し、外形を修復しても「修復した」という履歴が残る。「戻れない」とは、生成の局所的な時間構造であり、出来事を記号の可逆的な並べ替えから区別する。

不可逆性は、すべての結果が永久に固定され、修復が不可能であることを意味しない。修復それ自体が新しい関係履歴となることを意味する。何も起こらなかったかのように元の位相へ戻ることはできない。

11.2 死を追い越せない可能性

ハイデガーは死を、現存在にとって最も固有で、没交渉的で、確実でありながら時期が不確定で、「追い越すことのできない可能性」として捉える。生成学はこれを、死後を表象する可能性ではなく、自己が自らの死を完了した過去として経験し、その結果を報告するために帰還できない限界として読む。死は予期され、現在の行為へ畳み込まれうるが、その現実化は、結果を後の応答として受け取る自己の可能性を消滅させる。

通常の生成では、出来事の後に変化した自己が残る。行為が自己以外へ差し出され、応答が帰還し、変化した自己がそれに直面する。死では、同じ経験主体への出来事後の帰還がない。したがって死は不可逆性の最大の非対称であり、完全なシミュレーションという幻想を現実へ接地する究極的限界である。

11.3 生を取り戻せない不可能性

すでに生きられた生は、同一の所有物として取り戻せない。失われた時間、選ばなかった可能性、壊れた関係、忘却された自己以前性は、記憶、シミュレーション、儀礼によって再び作用しうるが、同じ生にはならない。ノスタルジーはその距離を感じ、復古性はそれを克服しようとし、シミュレーションは克服されたように作動する像を生産する。

したがって生成学は、本来的な生が過去のどこかに完全な状態で保存され、それを回復できるという考えを退ける。生は取り戻せない。しかし別の即によって、新たに生成できる。これは喪失の埋め合わせではなく、以前には存在しなかった位相の生成である。

11.4 不可能生

本論文は「不可能生」を技術概念として導入する。不可能生は生物学的死でも論理的不可能性でもない。生物学的・社会的な存続が続きながら、自己が自己以外との個別具体的インタラクションを通じて、現実接地した自己固有の生を生成することが構造的に阻害された状態を指す。

不可能生では、制度、評価、資本、アルゴリズム、記号的自己像が、利用可能な席、応答、結果を先に割り当てる。主体は動き、働き、消費し、通信しているが、その行為は主として数値、地位、イメージ、市場価値として帰還する。自己以前性は消滅していないが、人間以前性との接触が遮断され、または既定の記号的応答へ変換される。人間は生存しながら、生きている実感を生成する力を失う。

したがって不可能生とは、空席から未来が失われた状態である。開いているように見えるが、成立可能な占有はすでに脚本化されている。それは擬似的空席の存在論的形態である。

11.5 生成生

生成生は、失われた生を回復した状態ではない。過去が復元不能であり、死が追い越し不能であることを引き受けるところから始まる。それでも身体は現実の空席へ入り、行為を自己以外へ差し出し、時間を介して予測不能な応答を受け、以前の位相へ戻れなくなる。この不可逆的変化は回復の失敗ではなく、生の現実化である。

現在は、回復不能な過去と追い越し不能な死のあいだの単なる一点ではない。まだ決定されていない関係が現実化しうる空席である。色気はこの席へ未来が到来する感性的な力、即はその現実化を可能にする生成的接続構造、自己証明は応答への後の気づき、作品性はそのような席を他者へ保存する作用である。

11.6 死・空席・無名性

死によって自己は自分の席へ戻れなくなる。しかし、印、型、物、実践、作用は残る。死者の席が力をもつのは、身体の帰還不能と関係の持続が共存するからである。その席が以前の占有者だけへ向けば、ノスタルジー、哀悼、フェティッシュを生む。後続者が死者を再現すると主張せず、新しい参与へ開けば、無名性と文化生成のインターフェイスとなる。

作品は作者に死を追い越させない。作者が戻れない場所で生成を持続させる。したがって作品性は象徴的不死や作者同一性の保存ではなく、他者が別の位と相を生成できる空席を残す能力である。

12. 統一命題

命題1　空席命題

空席とは、現在の占有を欠きながら、過去の関係と未来の参与可能性を局所的に保持する席である。

命題2　時空間的インターフェイス命題

空席は、不在の身体の過去と到来しうる身体の未来を現在の場所へ接続する時空間的インターフェイスである。

命題3　空席の力命題

空席の力とは、まだ実現していない参与可能性との関係が、現在の注意、感情、判断、行為を変形させる生成的運動である。

命題4　色気命題

色気とは、形が空を保持し、空席を介して未特定の他者の参与を誘発するときに現れる感性的・関係的な力である。

命題5　未完了性命題

色気は完全な現前ではなく、「まだ」という時間を保持する関係の未完了性から生じる。

命題6　フェティッシュ命題

フェティッシュとは、不在の身体または不可視の関係との接触が、特定の形、部分、物、印へ凝縮した状態である。

命題7　フェティシズム命題

フェティシズムとは、凝縮を生成した関係が忘却され、その力が物それ自体の固有属性として固定されることである。

命題8　縮尺命題

縮尺とは、空間的広がりと時間的蓄積を限定された形へ凝縮し、その形から形を超える世界への接続を可能にする生成操作である。

命題9　余白命題

余白とは、形の内部に空を保存し、他者の解釈、身体、行為、未来の応答のために残された空席である。

命題10　間命題

間とは、異なる存在が差異を失わず即するために、空間的距離と時間的遅延を同時に調整するインターフェイスである。

命題11　開閉同時性命題

生成的な形は、境界によって空間的・形式的に閉じながら、余白によって時間的・関係的に開く。

命題12　作品性命題

作品性とは、時間と関係を形へ凝縮しながら、その形の内部に他者が参与できる空席を保存する作用である。

命題13　ノスタルジー命題

ノスタルジーとは、不在または想像された過去が現在へ感情的に作用する、空席の力の過去方向的な相である。

命題14　擬似的空席命題

擬似的空席とは、参与可能性を呈示しながら、その参与が支配モデルまたは座を変形することを許さない席である。

命題15　生成的空席命題

生成的空席とは、事前設計へ還元できない応答を通じて、占有が位、相、座を再帰的に変形しうる席である。

命題16　不可逆性命題

現実接地した生成は、出来事以前の位相への完全な帰還を不可能にする差異を残す。

命題17　不可能生命題

不可能生とは、生物学的・社会的存続が続きながら、自己以前性が自己以外との個別具体的インタラクションを通じて現実接地した生を生成することを阻害された状態である。

命題18　生成生命題

生成生は、過去の生を同一のものとして取り戻すことでも死を追い越すことでもなく、身体が現実の空席へ即し、自己以外の応答によって不可逆的に変形されるときに新たに始まる。

13. 理論的意義と限界

本論文の第一の意義は、空席を不在の比喩から、空間と時間を横断するインターフェイス概念へ転換した点にある。これにより、席は身体を待つ静的な容器ではなく、過去と未来を現在へ作用させる生成の節点として理解される。

第二の意義は、色気を身体や対象の属性から解放し、空席が参与を誘発する関係力として定義した点にある。これにより色気は、性的魅力に限定されず、作品、建築、庭、制度、ウェブ画面における非閉鎖性の感性的現れとして分析できる。

第三の意義は、フェティッシュを否定的な固定化だけでなく、時間と不在が形へ凝縮する局面として捉え、その開放的可能性とフェティシズムへの閉鎖を区別した点にある。

第四の意義は、縮尺、余白、間を、日本文化の本質ではなく、形式的閉鎖性と関係的開放性を同時に生成する技法として位置づけた点にある。

第五の意義は、ノスタルジー、シミュレーション、死を一つの時間的インターフェイス論へ統合した点にある。ノスタルジーは空席の力の過去方向の相、シミュレーショニズムは記号によって既に占有された席を批判的に可視化する実践、死は記号的投射と身体的帰還とを分かつ追い越し不能の限界として位置づけられる。

第六の意義は、生存が持続しながら生成的接触が構造的に阻害される現代的状態を「不可能生」として概念化した点にある。この概念は、「生を取り戻すこと」が新たな懐古的・復元的シミュレーションへ転化することを防ぎ、同一の生の回復ではなく別の生の生成へ理論を向け直す。

一方、本論文は日本文化全体を一つの原理で説明するものではない。また、色気の歴史語彙論、九鬼研究、精神分析、マルクス研究、仏教学、建築史を代替しない。今後は、具体的作品の比較分析、空席の制度的排除、ジェンダーと欲望、商品化による色気のフェティシズム化、デジタル・インターフェイスにおける擬似的空席を検討する必要がある。

結論

本論文は、空席を、身体がいない場所ではなく、過去の痕跡と未来の参与可能性を現在へ接続する時空間的インターフェイスとして定義した。空席の力とは、まだ実現していない参与可能性との関係が、現在の身体、注意、感情、判断、行為を変形させる生成的運動である。その力が、形の非閉鎖性を通じて他者の注意と参与を誘うとき、色気として感受される。

色気は空席の開かれた力であり、フェティッシュはその力が特定の形や印へ凝縮した状態である。フェティシズムは、凝縮を生成した関係が忘却され、形が力を自己所有しているとみなされる閉鎖である。非はその固定を解除し、形の内部へ再び空席を開く。

縮尺は世界を形へ閉じ、余白はその形を世界へ開く。間は閉鎖と開放の距離と時間を調整する。したがって、日本文化に反復して現れる縮尺と余白は、単純な小ささや空白の美ではない。それは、空間を限定することによって時間を開き、形を凝縮することによって他者の参与を可能にする生成技法である。

ノスタルジーは空席の力を失われた過去へ向け、色気はそれを未特定の未来へ向ける。シミュレーションは過去性と開放性の記号を製造でき、シミュレーショニズムはそのコード化された流通を露呈する。したがって決定的な区別は、参与を既定モデルの内部へ収容する擬似的空席と、応答がモデルおよび座そのものを変形することを許す生成的空席とのあいだにある。

自己は過去の生を同一のものとして取り戻せず、自らの死を追い越して、その出来事から帰還することもできない。不可能生は、この二つの限界のあいだにある現在が、制度的・評価的・記号的な脚本によって既に占有されるときに成立する。生成生は、過去の復元や死後のシミュレーションによってではなく、実効的な空席へ入り、自己以外の応答による不可逆的変形を引き受けることによって始まる。

この構造は、基本系列を変更しない。

印 -> 型 -> 形 -> 座 -> 席 -> 位 -> 無名性 -> 文化生成

空席は席の時空間的様態であり、色気はその力の感性的現れである。フェティッシュ、縮尺、余白、間は、その力が形へ凝縮され、保存され、再び開かれる仕方を記述する。空は全体の非閉鎖性を保証し、即は空席への参与を現実化し、位と相を生成する。是はその関係を暫定的に現成し、非は固定された是を再び空へ開く。

最終命題は次の通りである。

空席とは、未来の他者が現在へ作用し、不在の過去が回復可能になることなく痕跡として留まる場所である。色気とは、未来性が形の内部に感受される力である。不可能生とは、あらかじめ脚本化された現在によって、その未来性が閉鎖された状態である。生成生は、身体が即によって実効的な空席へ入り、現実接地した応答を受けるときに始まる。作品性とは、時間と関係を一つの形へ凝縮しながら、その形を自己完結させず、自らの死を追い越せない自己の後にも生成が持続しうる席を残すことである。

参考文献

Works by Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Monograph, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 0.9, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Particular-Concrete Necessity in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Generative Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Ontology of Kata: Mark, Namelessness, and the Foundations of Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Generative Theory of Za, Seki, and Topology: A Unified Theory of Mark, Kata, Form, Namelessness, and Cultural Generation through Emptiness, Soku, Provisional Affirmation, and Differential Negation. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Philosophy, Aesthetics, and Cultural Studies

Baudrillard, Jean. Simulacra and Simulation. Translated by Sheila Faria Glaser. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1994. Original French edition published 1981.

Boym, Svetlana. The Future of Nostalgia. New York: Basic Books, 2001.

Crimp, Douglas. “Pictures.” October 8 (Spring 1979): 75–88.

Foster, Hal. The Return of the Real: The Avant-Garde at the End of the Century. Cambridge, MA: MIT Press, 1996.

Freud, Sigmund. “Fetishism.” In The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, Vol. 21, translated and edited by James Strachey, 147–157. London: Hogarth Press, 1961. Original work published 1927.

Heidegger, Martin. Being and Time. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. Oxford: Blackwell, 1962.

Isozaki, Arata. Ma: Space-Time in Japan. Exhibition catalogue. New York: Cooper-Hewitt Museum, 1979.

Kuki, Shūzō. Reflections on Japanese Taste: The Structure of Iki. Translated by John Clark; edited by Sakuko Matsui and John Clark. Sydney: Power Publications, 1997. Original Japanese edition published 1930.

Lee, O-Young. Smaller Is Better: Japan’s Mastery of the Miniature. Translated by Robert N. Huey. Tokyo and New York: Kodansha International, 1984.

Marx, Karl. Capital: A Critique of Political Economy, Vol. 1. Translated by Ben Fowkes. Harmondsworth: Penguin, 1976.

Nishida, Kitarō. Last Writings: Nothingness and the Religious Worldview. Translated by David A. Dilworth. Honolulu: University of Hawai‘i Press, 1987.

Nishitani, Keiji. Religion and Nothingness. Translated by Jan Van Bragt. Berkeley: University of California Press, 1982.

Okakura, Kakuzō. The Book of Tea. New York: Putnam, 1906.

Winnicott, D. W. “Transitional Objects and Transitional Phenomena: A Study of the First Not-Me Possession.” International Journal of Psycho-Analysis 34 (1953): 89–97.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。